

古代建築についての二三の調査

1969年度建造物研究室・平城宮跡発掘調査部の調査 1

法隆寺中門 西院伽藍のなかでも、金堂・塔・回廊とともに飛鳥時代の建造物として国宝に指定されている。しかし、なぜか単独の建造物として研究対象となり成果が公表されることは少なかった。このたび、建造物研究室では、「日本古代建築の部材構成に関する研究」(沢村)に科学研究費補助金が交付されたのを機会に、中門の第1回調査を実施し、その復原と部材構成について試案を作成した。成果はおおよ次のようである。

1 古材の残存 現状と明治34年の修理時に作成された実測図とを比較して、材質・形状・寸法・風蝕から当初材の現位置をたしかめたところ、上・下層とも柱・斗拱・通肘木その他に多数の創建材と古い時期の補足材が残存していることをみとめた。特に上層大梁・棟木・棟木下肘木等が、原位置または転用されて残っていることがわかった。

2 角材の断面寸法 当初材とみられるものでも、金堂・塔の部材ほどの仕上げ精度はみられず、成巾とも平均値に対し6mm以内の出入があるものが多い。測定値の頻度グラフの山を中心に全部の60%を占める部分について測定値の最小自乗法による平均値をとると、角材の成は23.1cm・巾は18.3cmとなる。これは造営尺でどうなるか、簡単には定められないが、仮に中門初層柱間寸法が高麗尺完数で計画されているとし、その平均値から1尺を35.2cm(現1,163尺)とすると、成は6.5寸、巾はその5分の4にあたる。これは金堂・塔にみられる7.5寸×6寸の角材断面より1寸低い成を規準とした可能性をしめす。たゞし、測定値にバラツキが多く、斗拱その他実測寸法に不十分な点があるので、まだ断定はできない。

3 構造復原 現状・古材位置・明治修理以前実測図を検討し、修理前は中門と金堂とが酷似した構造だったこと、修理にも前の構造をほぼ伝えるよう留意していたことを知った。

調査結果と金堂の復原構造を参照して中門の創建時構造を復原してみた。柱高・斗拱などの積上高に疑問はあるが、およそ第1図のような断面と考えることができる。重要な点でなお不明なことも多いので、さらに調査を重ねて修正したい。この調査にあたって法隆寺当局・奈良県文化財保存事務所・西岡常一氏らの御協力をいただくことができた。(沢村 仁)

薬師寺東塔 東塔の建立をめぐることは、本薬師寺移建説と天平2年造立説の2説があり、これに関連して古い部材に手法・寸法の点で2種類あるのではないかという疑問が提示されている。⁽¹⁾この点について部材の寸法差を確かめる目的で、塔の内部から組物を実測調査した。第

第1図 法隆寺中門推定復原断面図

東大寺法華堂正堂

2 図中・下段は身舎と裳階の各部寸法の分布状況を表わしたものである。

薬師寺東塔 裳階

1 斗 身舎の斗は、一般的に寸法差が少なく、高い集中度を示す。斗成(斗の高さ)では折線に鞍部が生ずる所があるが、それが材の2種を示すものとは考えられない。なぜならば、斗巾では高い集中度を示すからである。裳階の斗では、同一層での寸法の分散化がみられ、層ごとの寸法差も大きい。

薬師寺東塔 身舎

2 肘木 身舎・裳階の肘木成(肘木の高さ)は、ともに全般的には集中度が高いが、各層別にみれば両者で異った変化が認められる。すなわち、身舎では、初重下段・同上段・2重・3重の順に肘木成を低くしている。これは肘木長さの縮小に応じた変化

第2図 斗寸法・肘木寸法分布図

である。いっぽう裳階では、肘木長さを各重同寸としているため、肘木成も同寸で、集中度は高い。しかし、3重の折線には2つの山が認められる。

3 身舎肘木の笹繰り 笹繰りの無い個所は、各重の隅行肘木の他に、初重内部の50ヵ所(89%)と外部の17ヵ所(24%)2重内部のすべてと外部壁付下段・手先方向、3重内部の20ヵ所(50%)、三手先目では2重北面に4ヵ所(同一個体)にすぎない。初重・3重の笹繰り配置はきわめて不規則であり、身舎内部には未完成のものも数例ある。

以上のようにみていくと、古材に2種類ある可能性は、身舎については成立しないように思われる。ただし、裳階については問題が残る。

東大寺法華堂正堂 薬師寺東塔の場合とほぼ同様の趣旨と方法で調査を行ない、当初の材とみられる部材について第2図上段のような結果を得た。分布状態を薬師寺東塔身舎のそれと比較すると、集中度は鈍いけれども分布状態はよく似ており、これを当初材寸法の個体差の範囲であると仮定できる。ただし、当堂は後世の大改造を受けている⁽²⁾。中古材のうち特に注目されるのは母屋柱上組物の手先肘木である。これは繫梁のように側桁まで延びており、中古に補強のために挿入されたと思われる。これにつれ、その上の三斗には中古取替材が多くに多い。これらの中古材は、ほとんど平安末期の様式を示している。これらの材の寸法と当初材の寸法とを比較すると、斗の木口巾が小さくなるほかは平均値でほぼ同様の値となるが、寸法のバラツキは大きい。

註 1 奈良県教育委員会『薬師寺東塔及び南門修理工事報告書』(1956.11)。

2 例えば 斗の調査総数297個のうち当初材の184個、中古材59個、明治材54個である。

(宮本長二郎)